The Newcomes における "respectability" のテーマについて

鈴　木　幸　子

I

The Newcomes は,「*Pendennis* と同じように[1]」24巻の月刊分冊で，約2年間にわたって出版された W. M. Thackeray の作品である。これは，一大長篇小説で，サッカレーの円熟した才能を充分に生かした作品であるにもかかわらず，物語の進展が「氷河」のように遅いとか，"the shell of a great novel"[2] であるなどと，非難の多い作品である。しかし，1855年に出版された当時から，少なからぬ数の批評家たちは，この作品に対して感動したという賛辞を述べている。[3] その中でも，あらゆる角度からこの作品を検討し，伝記的解釈を与えているのは G. N. Ray である。Ray は，この作品のテーマに関して次のように述べている。

> As is suggested by his subtitle, "the memoirs of a most respectable family," he is conducting an inquiry into the nature of "respectable family" as the governing code of the upper and middle classes of Victorian England, "the most polite, and most intelligent, and best informed, and best dressed, and most selfish people in the world."[4]

サッカレーは *The Newcomes* という作品において，"respectable" という言葉の意味を人々の生活の中で追求した。すなわち，サッカレーは，当時，19世紀前半の人々，とくに上層中産階級の人々が，この言葉を如何に受けとり，これを如何に重要視し，彼らの生活信条としていたかを，同じ中産階級の一員として考え，批判した。そして，さらにこの "respectability" という観念によって支えられた彼らの生活を作者の見解から理想的に描きあげた。いいかえれば，この作品は「respectability 探求の書」である。

この作品の Newcome という固有名詞が，新興の上層中産階級を意味しているとともに，respectable という言葉は上層中産階級の brand であり，かつまたニューカム家の特質でもある。もともと respectability という観念は，とくにヴィクトリア朝の中産階級の人々によ

って育てられた，一つの生活目標のようなものであった。したがって，この言葉は，この時代の英国人の文化や生活習慣と深い関係を持っている。すなわち，この言葉の観念と彼らの生活様式とは，相互に影響しあって，短いけれども一つの歴史を作っている。

II

Walter Allen によれば，この respectability の観念は，次のような変化発展を辿っている。[5] 18世紀も半ばを過ぎた頃，respectable という言葉は，道徳的に優れ，尊敬に値いするという意味をもっていた。したがって，この言葉は，社会的地位があり，またその地位相応に道徳的である人々に適用された。その後，この言葉は，社会的地位には関係なく，借金をしないで，ひたすら仕事に励む職人に対して使用されるようになった。そして，この「社会的地位に関係なく」という考えは，あらゆる階層の人々の心をとらえた。Richardson は，彼の小説の教訓的側面から考察されるとすれば，この respectability の代弁者でもあった。この観念は，さらに Evangelical Movement という形をとって英国中にひろまり，Cowper の詩や Jane Austen の小説となって開花し，この観念をより強固なものにした。小説において respectability を重んずる結果，性についての率直な表現も禁止され，Fielding の小説は追放された。そして，この respectability という言葉を掲げることで，その時代の悪徳や人間の弱さを改めることが出来るという楽観的な考えが神聖視されるようになった。当時の急激に進行する産業革命は，人口過剰，アルコール中毒者，若年労働者からの搾取など，あらゆる陰惨な社会悪をもたらしていた。これらの社会悪を除くために，種々の法律や制度が考えられ制定されたが，一方，これらの社会悪は，respectability の観念を基盤として，"industry" "thrift" "self-control" などの美徳を国民の間で育てることによって除かれるであろうと考えられた。このような考え方の背後には，中産階級の意見があったことはいうまでもない。しかも，この respectability の観念は，程度の低い考え方としては，たんに外見的に "good form" を維持したいという願望を生み出した。同時に，高度の考え方としては，道徳的にも，経済的にも，すなわち，精神的にも，物質的にも向上したいという願望をも国民の間に生みだした。初期ヴィクトリア朝の読者が，こうした respectability の観念を人生の目標としたとすれば，当時の小説家たちも，何らかの形で読者と意見を同じくしようと努力した。そして，当時の多くの小説家たちは，読者と意見を同じくすることで自信を得て，一般読者大衆に語りかけた。

サッカレーも，この観念にとらわれた小説家たちの一人に数えられるかもしれない。しかし，彼は，あくまでも，このような時代から超越者として臨もうとした。彼は，彼の生きた時代を忠実に描く努力はしたが，それを何らかの形で諷刺し，かつまた，そこに自己の経験によって築き上げた人生観を投影することで，超時代的な人間像をも創りあげることができた。*The Newcomes* は，このよい例証としてあげられると思う。

Ⅲ

サッカレーは，*The Newcomes* で，この respectability の観念にとらわれた時代を描き出そうとした。そこで彼は，外見を重んじて，精神的に貧しい "the respectable" と，外見は貧しいが精神的内容が高貴である "the respectable" を対称的に取り上げている。

まず，ニューカム家という貴族の末端に連なり，この "a respectable banker" の一家を作りあげた一代目の Thomas Newcome は，18世紀の後半，London に姿を現わし，"a respectable family" の基礎を作った。

> Thomas Newcome, who had been a weaver in his native village, brought the very best character for honesty, thrift, and ingenuity with him to London, where he was taken into the house of Hobson Brothers, cloth-factors; afterwards Hobson & Newcome.[6] (I, 17)

一介の労働者である Thomas Newcome は，中産階級の人々が respectable と見なす美徳，"honesty" "thrift" "ingenuity" を持っているがため，中産階級へと浮び上ることのできた人物である。この時代は

> When pigtails still grew on the back of the British gentry and their wives wore cushions on their heads, over which they tied their own hair.....: when Mr. Washington was heading the American rebels with a courage..... (I, 16)

と述べられているところから，おそらく1775年から1776年頃の時代を物語っていると思われる。この時代では，社会における上下の階級を人々が移動することは，まだ容易であった。しかも，地方におけるより，London のような大都会では，とくに俗にいう出世が可能な時代であった。[7] したがって，一代目の Thomas Newcome は，

> Mr. Thomas Newcome, afterwards Thomas Newcome Esq., and sheriff of London, afterwards Alderman Newcome, the founder of the family whose name has given the title to this history. (I, 16)

と，つぎつぎと respectable な地位に着きえたのであった。この Thomas の代では，まだ honesty, thrift など，内容において道徳的に立派な面もあった。しかし，彼の孫 Barnes Newcome に至ると，美徳は，外見を保ち，世間的成功を得るための手段でしかなくなる。

この Barnes Newcome は，敏腕の銀行家であるが，外見のみ a respectable man なの

である。

> Barnes Newcome never missed going to church or dressing for dinner. He never kept a tradesman waiting for his money. He seldom drank too much, and never was late for business, or huddled over his toilet however brief had been his sleep, or sever his headache. In a word, he was as scrupulously whited as any sepulchre in the whole bills of mortality. (I, 104-105)

このような Barnes Newcome の日常生活の内容は,「道徳的な外見を保つこと」の一語につきる。Macmaster 氏の言葉によれば,「美徳はまるで流行のように追い求められ,それは,出世主義者の必要品一覧表の中の一品目としてのせられている。」[8]

形式的に,また外見的に道徳家である Barnes Newcome は,利己的で人間愛に欠けた人物でもある。

> "In the city we have no hearts, you know, Colonel." (I, 185)

と,自からも語る Barnes は,心の冷たい打算的な人間であった。彼は,伯父, Colonel Newcome の社会的地位があまり高くないことを知るや,彼に冷淡であるばかりか,自分の妹 Ethel と Colonel Newcome の息子 Clive との結婚問題についても,平然と Colonel Newcome に嘘をいうことで,これを妨害する。大佐は,これを知って Barnesに怒りを爆発させ,Barnes に非難の言葉を浴びせる。すると,Barnes はこれに対して,大佐が投資している銀行に,金融的打撃を与えることで,間接的に大佐に報復する。Barnes は,自分の妻 Clara ですら,買い求めるも同然の方法で彼女を手に入れる。そして,それが悪い買物であったと思うと,できるだけ高値で彼女を売る。その上,彼女を保護する相手から損料を最後の一ペニィまで絞り取る。[9] このような,外見上 respectable な人間とは似ても似つかぬ悪人の Barnes に対して,Colonel Newcome は,

> "I'd rather Clive were dead than have him such a heartless worlding as this." (I, 104)

と考える。

牧師の Charles Honeyman も,Barnes と同じ種類の,外見のみ respectable な人間である。彼は,Mayfair にある Lady Whittlesea's Chapel の牧師であり,Colonel Newcome の義理の弟である。彼は学生時代からずっと借金をする癖があり,友人とけんかをするなど,

素行が悪い。牧師となっても借金をする癖は抜けきらず，華やかな生活を続ける。サッカレーは，この牧師の物語を始めるのに，Saint Pedro of Alcantara の物語と対称して，話を進める。Saint Pedro は何時も裸足で歩き，食事も三日に一度，睡眠も一日一時間半という禁慾生活をする聖者である。ところが，Honeyman の足は，白い手と見まがうばかりにふくよかでバラ色をしている。彼のベッドの側には，女性信者の手で美しく刺しゅうのほどこされたスリッパが並んでいる。彼は一晩のうちに，三度もお茶の時間をとるほどぜいたくである。彼の教会が不況となると，Sharrack が教会の持ち主となる。すると，この Sharrack は教会を劇場のように経営する。教会の座席は劇場の桝席のように売られ，説教者は予約されて，広告で宣伝される。そして，この教会の地下室には，ぶどう酒が一杯貯えられる。「Sharrack にとっては宗教も商業的投機の対象となる。」[10]

以上のように，外見のみ respectability を維持する悪徳人物と対称させて，外見は respectable でなくても，精神的に respectable である人間や，失敗を経て内面的に respectable な人物となる人々を作者は例証している。

この例の第一人者は Colonel Newcome である。彼は，この小説で，彼の生い立ちから死ぬまで描かれている。この点では，彼はまさにこの物語の主人公である。[11] 彼は一代目の Thomas Newcome の先妻の息子であり，Barnes の伯父にあたる。作者は，Colonel Newcome を中心にして，respectability の真にあるべき姿と，同時に，彼の時代では，こうした理想が達成されることが如何に困難であるかを，まやかしの respectability と対称させて，見事に描き出している。ここに物語られる Colonel の一生は，美しく，読者に感銘を与えるものである。Colonel Newcome は，幼少の時，負けずぎらいで勇敢な少年であった。彼は義母の Mrs. Hobson と不和であったので，成長してから印度に出かけ，軍人となる。話のこの部分には，サッカレーの自伝的要素がかなり多く取り入れられている。印度で，大佐は目覚ましい働きをしたために，respectable な社会的地位を維持するだけの経済力を持って英国に帰って来る。

大佐については，

He would believe all and everything a man told him. (II, 188)

と述べられているように，生れつき単純で正直であり，愛情深く，心が清らかであった。彼は，ある時期までは，質素であったが，外見上も精神的にも，ともに respectable であった。しかし彼はその後，二回人生のつまづきに出あう。その一つは，Clive と Ethel とを結婚させる計画に失敗したことであった。それもすべて Barnes の言葉を Colonel が信じすぎたためであった。この時から，愛すべき Colonel の性格は以下のように変って来る。

> Now this gentleman could no more pardon a lie than he could utter one. He would believe all and everything a man told him until deceived once, after which he never forgave. And wrath being once roused in his simple mind and distrust fixed there, his anger and prejudices gathered daily. He could see no single good quality in his opponement; and hated him with a daily increasing bitterness.
>
> (II, 188)

この事件後，Colonel は，もはや以前のように寛大で人を愛する美徳の人ではなくなる。彼は，公衆の面前で Barnes を罵り，彼に報復する。その後，Colonel は，善意から Rosey と Clive を結婚させ，かえって，この二人の若者に不幸を招いてしまう。もう一つの Colonel の人生の挫折は，経済上の失敗であった。彼は Clive の将来を思うあまり，彼自身の全財産を Bundelcund Banking Company に投資する。しかし，この銀行も経済的危機に，Barnes の手形支払拒否という陰険な仕返しをうけ，南海会社のような破局への道を辿り，遂に破産する。このために，Colonel をはじめ，Rosey 母子および Colonel の友人に至るまでそれぞれの財産が失われてしまう。このようにして，Colonel は，respectability を保つための経済力と人々の信望を一挙に無くする。この事件で，Colonel は Rosey 母子および友人たちに責任を感じ，自己の全財産および年金までも借金の返済にあててしまう。彼は，ここに至って，外見上の respectable なものを，すべて失ってしまう。しかし，それにもかかわらず，彼の心の中にある義務感，愛情，正直，謙虚などという美徳が，さらに輝きを増す。彼は，晩年の日々を，誰の負担にもならないように Grey Friars 無料養老院で送る。このような Colonel の晩年には，読者に憐みの心を大いにいだかせるものがある。そして，彼の最後は，殉教者や聖人の最後のように美しく描かれている。Colonel を描くにあたって，サッカレーは，この世の中が美徳の人に美徳ゆえに respectable な地位を与えないという justice のない社会と，それに対して，外見上の respectable を条件づけるすべての物を失っても，人間の魂はそれによってかえって respectable になるという，一種の禁慾主義者の理想を実現させている。

Barnes と Colonel に代表される二種類の respectable men の中間的人物は，Ethel と Clive である。彼らは，外面的に respectableな 人間から，内面的に respectable な人間へと成長して行くタイプの人間である。Ethel は，少女時代から甘やかされた。彼女の家庭教師は，口やかましい母親によって，あまりにたびたび取り替えられたので，Ethel は年令の割には無智な少女であった。また，Ethel は

> "... a haughty girl of the highest spirit, resolute and imperious..."
>
> (I, 35)

であった。彼女の気位いの高さは，成人となっても変らず，Clive の愛を素直に受け入れないで，Lord Kew や Farintosh という貴族の息子と危ふく結婚しようとする。彼女もまた外見上の respectability にとらわれる女であった。しかも，彼女の兄 Barnes と彼の妻 Clara の例に見られる，金銭上の関係で結ばれた結婚が不幸な結果を招いたことを知り，Ethel は，そこに自分の人生を予告される思いがする。そこで Ethel は，自分の婚約を破棄する。しかし，彼女はその後きびしい試練に耐えねばならなかった。彼女は，やがて，Clive が Rosey と結婚したことを知る。さらに Bundelcund Banking Company が Barnes によって，破産の危機に直面するという事件は，Colonel と Barnes の間に，さらにきびしい冷戦をもたらした。Ethel は友人，Mrs. Pendennis にあてた手紙で以下のように語る。

> Hard, selfish, worldly, I own my brother to be, and pray Heaven to amend him; but dishonest, and to be so maligned by the person one loves best in the world! This is a hard trial. I pray a proud heart may be bettered by it. (II, 372)

彼女は，これらの不幸な出来事で，精神的に大きく成長する。彼女は，謙譲な心や，愛と思いやりの心を学びとる。彼女は，兄 Barnes の子供たちが母親に置き去られた後，彼らの世話を献身的にする。そして，Clive や Colonel が経済的に苦境におち入っているのを知ると，人知れず援助の手をさしのべる。

> "I desire, sir, that six thousand pounds may be given to my cousin," Miss Newcome said, blushing deeply. "My dear uncle, the best man in the world, whom I love with all my heart, sir, is in the most dreadful poverty. (II, 478)

Ethel にとって，Colonel たちの不幸は耐えがたいことであった。彼女は自分の名を秘して，Clive に自分の財産の一部を送ろうと決意し，弁護士 Mr. Luce のもとに，Pendennis に付添われて出かけて行った。

> "And I understand you want this money paid as coming from the family, and not from Miss Newcome?" says Mr. Luce.
>
> "Coming from the family — exactly" — answers Miss Newcome.
>
> Mr. Luce rose up from his old chair — his worn-out old horsehair chair — where he had sat for half a century and listened to many a speaker very different from this one. "Mr. Pendennis," he said, "I envy you your journey along with this young lady. I envy you the good news you are going to carry to your friends—and, Miss Newcome,

> as I am an old — old gentleman who have known your family these sixty years, and saw your father in his long-clothes, may I tell you how heartily and sincerely I — I love and respect you, my dear? When should you wish Mr. Clive Newcome to have his legacy?" (II, 478)

Mr. Luce の驚きと感動が入り混じった言葉は，きわめて暗示的である。彼は，半世紀もの間，Ethel のような用件で来る客を迎えたことがない。いやそれどころか，"many a speaker very different from this one" すなわち，人に与えるのではなく，人から奪うために弁護士を訪ずれる客が多いのである。Mr. Luce は，Ethel の立派な行為に対し，愛と尊敬の念を捧げる。かくしてEthel は精神的に人生での勝利者となった。彼女のこの勝利は，実に彼女の失敗を通して得られたものであった。[12]

Clive も，本来，正直で寛大な心を持ち，勤勉な若者であった。しかし，父親の Colonel から，あまりにも豊かな生活を与えられ，甘やかされた青年である。彼は社交が好きで，J. J. Redley のように真面目に絵の修業に励まない。そして彼は立派な馬に乗り，生れつきの美しい容姿に加えて立派な服装に身をととのえ，外見上，きわめて respectable な紳士である。だが，彼は愛する Ethel が加わっている上層階級の社交界には出席できない。そこで彼は，舞踏会の招待券などを手に入れるため，貴族の子弟たちの "a tuft hunter" になったりする。この時代の Clive は，外面とは反対に内面的には貧しい青年である。さらに，彼が外見上の華やかな生活を追い求めても，彼の社会的地位の低さと，彼の画家という職業は，いたずらに上流社会の蔑視を買うばかりである。Clive は失望の日々を過す。しかし，やがて彼も自己の生き方に自信を持つようになる。

> Clive. ... My lot in life is not brilliant; but I will not change it against that young man's — no, no with all his chances.
> Ethel. What do you mean with all his chances?
> Clive. You know very well. I mean I would not be as selfish, or dull, or as ill-educated — I won't say worse of him — not to be as handsome, or as wealthy, or as noble as he is. I swear I would not now change my place against his, or give up being Clive Newcome to be my Lord Marquis of Farintosh, with all his acres and titles of nobility. (II, 116)

Clive は Ethel を諦め，Colonel のすすめる無気邪ではあるが無智な女と結婚する。Colonel の善意にもかかわらず，この結婚は失敗であった。Clive は，画家の仕事を続けながらも，ふたたび失意の生活を送る。

> Little Rosey bloomed in millinery, and was still the smiling little pet of her father-in-law, and poor Clive, in the midst of all these splendours, was gaunt, and sad, and silent; listless at most times, bitter and savage at others, pleased only when he was out of the society which bored him, and in the company of George and J. J., the simple friends of his youth. (II, 322)

Clive は，いわば世の中の誤まった価値観による犠牲者である。[13] 彼は，外見のみの繁栄を求める社会にもてあそばれ，人生に対し消極的な態度をとる。その後，Colonel の破産という不幸が訪れ，Clive は画を書くことで生計を立てる。Colonel に出資した Rosey の母，Mrs. Mackonzie の，Clive に対する専横な言動，Rosey の病死，子供の世話，これらすべてに Clive は耐えて行かなくてはならない。しかし，この重なる不幸にもかかわらず，Colonel と Clive の親子の愛情は美しく保たれる。また，Clive とその息子との関係も同じことである。

> It was touching to see the eagerness and tenderness with which the great strong man now assumed the guardianship of the child, and endowed him with his entire wealth of affection. (II, 500)

Clive は，自己のすべての人生を神にゆだね，artist としての天職と，父親としての義務および愛情のある生活を送る。以上のように Clive もまた，外見的に respectable なものすべてを失うことにより内面的に respectabe な人間として完成されていく。

Ⅳ

サッカレーは，respectability のテーマをこの物語の中で有機的なものにするため，動物の imagery を多く用いている。序章の動物寓話は，本文中の動物のイメージとともに，明らかにこの物語に対し，一つの視点を提供している。序章に登場する

> "(a master wolf who) was so cunningly dressed up in sheep's clothing"

は，Barnes のような人物像を期待させるものである。すなわち，"Wolf" は内面的に残忍性をもつことを表わし，"sheep's clothing" は外見的 respectability を象徴している。

本文中で，Clive や Perdennis に虚栄必がある時は 'peacock' の羽をつけ，流行のように牧師 Honeyman を信奉する人々は "a flock of sheep" と表現される。[14] 泣く事以外は能のない Rosey は "a little song-bird" と示され，彼女が保護を必要とする弱い愚かな女である

ということをあますことなく伝えている。牧師の Honeyman は "the old crocodile" で，そのイメージは，彼が外見上立派であるにもかかわらず，略奪を本能とする醜悪な動物であることを示す。Ethel のような a respectable lady も "An eaglet" で，小鳥の Rosey をおびやかし，獲物を見つけると，これを急襲する性質のあることを作者は仄めかしている。Rosey の母 Mrs. Mackenzie も Barnes に近い人物である。彼女は身辺や自己を飾ることに意を用い，内面的には下劣な人物である。彼女は常に Rosey を支配し，Clive に対しては狂暴な姑である。この女性を，Mr. Newcome は

"That woman grins like a Cheshire cat."

と語る。「にやにや笑う猫」というのは，「不思議の国のアリス」にも出て来る空想上の動物である。サッカレーも

Who was the naturalist who first discovered that peculiarity of the cats in Cheshire?

と述べているように，笑う猫を証明する学者はいないようである。したがってこの猫が笑うということは，不自然で不気味な感じを与える。このことから，猫と同じように笑うことのない婦人が，外見上笑おうと努めた時，彼女の顔に浮ぶ怪奇な表情を，このイメージは伝えている。

以上あげたような動物のイメージは，いずれも内面的 respectabibity を維持するにはマイナスとなる性質を各人が持っていることを伝えるために使用されている。

サッカレーは，*The Newcomes* を創作することによって，当時の人々が respectability を盲目的に維持しようとしている有様を諷刺的に描いた。作者は現実的な表現方法に対して，動物イメージを混えることでこれに成功している。そして，この作品は，たんに諷刺のみにとどまらないで，あるべき人生の姿，すなわち，本当の respectability は何かということを探求したものであった。そして，作者がここに見出した本当の respectability を支えるものは，「人を愛する心」であった。Pendennis 夫人は，Clive について次のように語っている。

"He has inherited that loving heart from his father,"...
"and he is paying over the whole property to his son." (II, 500)

ここには愛情について語るにも "pay" とか "property" という金銭に関係した言葉が使われている。このようにして，この世には如何に物質にとらわれた人間が多いかを作者は柔かく諷刺しているが，いずれにしても，この結末は「愛する心」こそ人類共通の財産であり，人生を耐えうるものにすると語っている。人には，この心を目覚めさせることによって，真に

respectableな人間になり得るのである。この「愛」に加えて，人生を respectable にするのは，高潔な人格である。これは Colonel の最後，および Saint Pedro of Alcanta によって象徴的に表現されている。すなわち，作者は，The Newcomes によって代表される新興の中産階級の人々に欠けている美徳を Clive や Colonel に求めた。そして，そこに見出された愛と清らかな生活というものは，作者の人生観，すなわち，キリスト教的であり，かつ，禁慾的道徳観なるもの[15]を反映して創り上げられたものである。この作品が読者に与える感動は，このような人生観から譲し出された一つの美しい人生であり，これこそ中朝ヴィクトリア朝社会では見出すことが困難な人生であろう。

註

1 Gordon N. Ray, *Thackeray: The Age of wisdom* (Oxford UP., 1968), p. 222.
2 Ibid., p. 248.
3 *Thackeray: The Critical Heritage*, ed. G. Tillotson & Donald Hawes (Routledge & Kegan Paul, 1968), pp. 217-250.
4 Ray, *op. cit.*, p. 238.
5 Walter Allen, *The* English Novel (1954; rpt. Penguin Books, 1963), pp. 142-145.
6 *The Works of W. M. Thackeray*, The Centenary Biographical Edition, XII, XIII (London, 1910-1911).
The Newcomes からの引用はすべてこの版による。カッコ内の数字は巻数と頁数を示す。
7 J. H. Plumb, *England in the Eighteenth Century*, The Pelican History of England (1950; rpt. Penguin Books, 1971), p. 18.
8 Juliet McMaster, *Thackeray: The Major Novels* (Manchester UP., 1971), p. 145.
9 Ibid., p. 161.
10 McMaster, *op. cit.*, p. 160.
11 G. Tillotson & Donald Hawes, *op. cit.*, p. 227.
12 James H. Wheatley, *Patterns in Thackeray's Fiction* (The M. I. T. Press, 1968), p. 109.
13 McMaster, *op. cit.* p. 165.
14 Ibid., p. 173.
15 Myron Taube, "Thackeray and the Reminiscental Vision," NCF, XVIII, (1963), p. 250.